

県中教研 英語部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 浅野 薫史
題 字 金山 泰仁 先生

実際のコミュニケーションにつなげるために

指導主事 大前奈津子

学校訪問研修で、「話すこと」の言語活動を中心とした授業をたくさん見させていただきました。

ある中学校の第3学年ではスキットづくりの活動を行っていました。先生は授業で「気持ちを表すときにこんな表現の仕方もあるよ」と新しい言語材料を提案し、場面を表す絵を提示されました。生徒はそれらを基に自由にスキットをつくっていました。新しい言語材料の定着を図るための練習の時間はなく、最初からまとまりのある英文の中で使いながらそれを身に付けていくという学習過程の工夫をしておられました。また、生徒は、指示がなくても何往復もやり取りをするスキットをつくっていました。それまでの継続した指導により、「まとまりのある内容を話すこと」が生徒にとって当たり前になっていました。これが「意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し触れること」なのだ、と感じました。その時の生徒たちの生き生きとした表情を覚えています。

現行の学習指導要領が実施されて2年が経ち、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」授業を展開しようと、先生方の意識も変わってきています。また、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定する」ことが大切だということも周知されてきました。文法事項を定着させるためではなく、コミュニケーションを行うために目的や場面、状況に応じて言語活動を行う。そのような授業展開を工夫し、互いのことをより知る喜びを生徒が味わうことができるようにしていきたいものです。

英語でのやり取りや発表の後は、生徒はうれしそう表情や自信に満ちた様子を見せてくれます。その喜びや自信は、コミュニケーションを図る資質・能力の源となるでしょう。

(東部教育事務所)

自律した学習者の育成を目指して

部長 浅野 薫史

現行の学習指導要領が全面実施となり、2年が経ちました。各学校において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」の領域における学習到達目標を意識した指導と評価が、生徒の確かな学力の育成、教員の指導の改善につながる取組となるよう、日々試行錯誤されていることと思います。今年度の研究大会では、4地区すべてにおいて、3年ぶりに部員が集まって実施することができました。授業研究や講義を対面で実施することで、部員の活発な協議や意見交換がされました。日々の取組を振り返り、授業改善の手がかりをつかむ素晴らしい機会となったと感じています。

さて、今年度すべての小学校5・6年生及び中学校1～3年生を対象に、外国語科(英語)の学習者用デジタル教科書が活用できるようになりました。これにより、音声読み上げ機能を活用し、個人のペースで学習に取り組むことや、書き込み機能を活用し、自分の考えを深めたり、互いの考えを確認し合ったりすること等を端末で行うことができるようになりました。このような機能を生かしつつ、言語活動を通したコミュニケーションを図る資質・能力を育成する授業展開が今年度の研究大会でも提案されました。今後、自律した学習者を育成するために、コミュニケーションの相手等への配慮を想定した言語活動が充実するよう、単元等の内容や時間のまとまりを見通した指導計画を立て、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な取組の充実・改善を図ることを大切にしたいものです。

生徒が、英語を生き生きと喜びを感じながら学ぶ姿を支えられるよう、英語部会の部員の皆さんとともに研究を深め、確かな学力の育成につながる取組を進めていきたいものです。

(富・大泉中)

第66回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、黒部市立明峰中学校を会場に、越間翔悟教諭による2学年の研究授業が行われた。

自分が興味をもった日本とアメリカの文化の違いについてALTに質問するなど、話し合いが多く取り入れられた授業であった。生徒はそれぞれ質問を考えた後、グループで考えを深めた。次時の発表に備え、生徒は意欲的にアメリカの文化について調べ、英文を考えていた。また、パワーポイントを効果的に活用して活動を説明したり、本時に定着させたい比較級と最上級の例文を常時映し出したりすることで生徒がいつでも確認できる工夫がなされ、授業が円滑に進められていた。

さらに、指示の多くが英語で出され、他のグループの意見を聞く機会も設定されており、生徒は様々な考えに触れることができた。ALTに質問するという場面設定も、生徒にとって魅力あるものとなっていた。生徒が聞くこと、書くこと、話すことの知識を広く活用できる授業であった。

部会協議では、有澤健主任指導主事（東部教育事務所）から、授業の課題とゴールを設定すること、友達や教師から学ぼうとする学び合いや、成績だけではない深い学び、よい聞き手を育てることの大切さについて助言していただいた。また、「教師がしっかり聞き、認める姿が生徒に伝われば、生徒も同じように友達の考えや意見を聞き、認めるようになる。中間指導と中間交流を活用し、授業の後半につなげることが効果的である。」とご指導いただいた。コミュニケーション能力の育成につながる、生徒の主体的・対話的で深い学びをさらに活発に進めるため、今後も研修を重ねていきたい。

仙名あづさ（下・入善西中）

■富山地区

富山地区大会では、富山市立新庄中学校を会場に、久保田由希恵教諭による1学年の授業、金川未蘭教諭とALTモーリシア・アレン先生による2学年の授業、中川拓也教諭による3学年の授業が行われた。

1学年では、自分の体調を説明したり、場面に合わせて指示を出したりすることを学習課題とした。与えられた場面設定でスキットをつくり、「正

確に体調を伝える」「適切に指示する」というポイントを確認し、ペア、4人グループで練習した後、実演を端末で撮影した。スキット作成や練習の時間が十分確保されており、生徒は協力し合い、意欲的に課題に取り組んでいた。

2学年では、アレン先生が疑問に思う日本人の行動に対する答えを考え、発表した。ALTが感情をこめて疑問点を伝えるのを生徒は適宜反応しながら聞いており、回答を考えるモチベーションを高めていた。そして、端末で検索し、それぞれの生徒が自分の言いたいことを英語で表現しようとしていた。

3学年では、ALTからジャマイカでは普通に行われていて、日本の学校でもしたほうがよいことを提案され、それについてグループで意見をまとめ、発表する活動をした。「ALTに提案する」というゴールが示され、生徒は伝えようとする気持ちを高め、意欲的に取り組んでいた。また、生徒のつぶやきを拾い、適宜シェアリングをすることで生徒は安心して学習に取り組んでいた。

部会協議①の1学年の部会協議で話題になった即興的にやり取りをさせることの難しさについて、大前奈津子指導主事（東部教育事務所）から、「書くという準備を減らし、知っている表現を繰り返し使わせ、即興で話す状況を継続的につくる。」という助言をいただいた。

2学年の部会協議では、ゴールを共有すること等について協議した。宮城渉指導主事（小中学校課）からは、「課題解決型」「内容が先、表現は後」「学び方を学ぶ」というキーワードを示してご指導いただいた。

3学年の部会協議では、前時までの学習や導入の活動等について協議した後、川井祐美主任指導主事（西部教育事務所）から、「言語活動を中心にした授業を仕組むこと」や「言語活動を行う際の目的や場面、状況の設定」等について助言をいただき、今後の指導改善の取組に向け、実りの多い研修会となった。

部会協議②の岐阜大学教育学部准教授の瀧沢広人先生による講演では、「学習指導要領を踏まえた効果的な指導と評価の在り方」と題し、言語活動の工夫や評価の観点の捉え方等についてご教示いただいた。

志賀 靖子（富・山室中）

【研究主題】 コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか
— 聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して —

■高岡地区

高岡地区大会では、射水市立新湊南部中学校を会場として、伊東和美教諭とA L Tハオツ・ワン先生による1学年の研究授業が行われた。

「教科書から得たフィリピンの情報を基に自分の考えを伝え合おう」という学習課題の下、読解した内容を踏まえて、登場人物の思いを考えたり、自分の考えを伝えたりするなどの言語活動が行われた。また、教科書の内容と関連付けながら、A L Tおすすめのフィリピン料理を紹介するなど、生徒が活動に興味をもちやすくするための工夫がみられた。



部会協議では、質問や感想を通して、効果的であった取組や課題について話し合った。端末を用いた授業に関しては、デジタル教科書にあるスラッシュ機能を活用することで文構造や句を意識し、内容を捉えられることや、発音、アクセントの確認に有効であることなど、紙媒体にはない機能のよさを実感することができた。一方、注意力散漫になることや、教科書やノートと違ってうまく書き込みができないなどの課題もみられた。

窪田俊介主任指導主事（西部教育事務所）からは、研究授業の内容と関連付けながら、「生徒が英語に触れる機会の充実」「教科書本文の内容を材料とした言語活動の設定」「言語活動の指導における工夫」の3点について助言をいただいた。また、読んだり聞いたりして得た情報を、自分の体験や考えと結び付けて書いたり話したりするなど、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能のいくつかを統合的に活用した言語活動の指導の在り方についても教えていただいた。

敬愛大学教授の向後秀明先生の講演では、「中学校外国語科における学習指導と学習評価のポイント」について、具体例を交えながら詳しく説明していただいた。今後の指導と評価の改善に向けて貴重な研修会となった。

柳澤 拓哉（氷・北部中）

■砺波地区

砺波地区大会では、砺波市立庄川中学校において大窪薫教諭とA L Tドミニク先生による第3学年の研究授業が行われた。

学習課題を「修学旅行で見つけたA L Tにおすすみたい場所やものを紹介するスピーチをよりよいものにしよう」とし学習を行った。生徒はインタビューマッピングを基に即興で構成したスピーチを、ペアで伝え合う活動を通して改良していった。マッピングを最初に行うことで、内容に広がりや深まりが生まれた。また、聞き手を意識して自分の考えや体験を盛り込んだスピーチを行うことができた。

部会協議では、授業者の自評から、協議内容の焦点化を図り、付箋を活用してグループ協議を行った。インタビューマッピングの継続が即興で話す力を伸ばしていることや、スピーチの相互評価でペアの変容を認めるだけでなく、自己の振り返りができることなど、今後取り入れていきたい点が多数挙げられた。



水上美淑指導主事（西部教育事務所）からは、「生徒がお互いに内容や言語表現においてアイデアをもらうことで多くの気付きがあり、互いのスキルを磨くことができる」「生徒が事前に目的を把握し、課題意識をもって取り組むことが大切である」と助言をいただいた。

また、文部科学省初等中等教育局教育課程課外国語教育推進室教科調査官の入之内昌徳先生によるアドバイザー講義を聴講した。「学習指導要領の趣旨を踏まえた中学校外国語科の指導の改善・充実～コミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指して～」と題し、中間指導を行う際には場面（文脈）の中で多くの例文に触れ、概念的理解（気付き）を促すことが大切であること、教師の役割は、FacilitatorからMotivator、Navigator、そして、Coordinatorへとアップグレードすべきであること、教師と生徒がゴールを共有すること等、これからの授業改善の視点として多くの示唆をいただき、大変学びの多い大会となった。

松田 恵美（小・大谷中）

各地区の取組から

黒部市中教研「本年度の取組から」

今年度黒部市では、デジタル教科書導入に伴い、その効果的な活用方法及び他のICTの活用を工夫する取組を続けている。

デジタル教科書の活用法として、新出文法事項導入時と本文の内容理解の際、音声とともに映像を見せられている。どちらも紙芝居のように絵や動画を見せることができるので、従来の教科書の挿絵のみよりも、生徒の理解の手助けとなっている。また、音読練習の際、再生速度を変えられるため、生徒の能力、到達度に合わせた様々な練習も行っている。今後、生徒が自分の端末でもっと自由に練習できるようになれば、音読練習もより効果的になると期待できる。

デジタル教科書とともに、ICTの効果的な活用方法の一つとして、プレゼンテーションソフトの活用の仕方を工夫している。一例として、今年度の研究授業の導入時、ALTからのビデオメッセージを生徒に提示した。その結果、メッセージが効果的に伝わり、生徒に課題に取り組む意欲をもたせることができた。また、新出単語の練習もプレゼンテーションソフトで行っている。教師は操作のみに集中できるので、生徒の活動の様子をよく観察できる。また、課題の提示においてもプレゼンテーションソフトを利用しているが、適宜イラストを提示するなど、視覚的な効果を狙える利点がある。一方で、デジタル教科書と同様に、黒板の板書のように残しておけないので、授業の振り返りをしにくいことが課題である。

さらに効果的に活用する機器として、教師が書き込むことができる電子黒板（モニター）が望まれる。授業の最後まで残しておきたい板書を電子黒板で生徒に提示し、音読練習用のアニメーション等を映すスクリーンと同時に提示できれば、授業の質がより高まるのではないかと。

ICT機器やデジタル教科書の効果的な活用方法について、今後も研究を続けていきたい。

村椿 勝（黒・明峰中）

滑川市中教研「本年度の取組から」

滑川市中教研英語部会では、研究主題に基づき、授業改善と指導方法の工夫に努めている。今年度は、ICT機器の効果的な活用方法について研修を行った。

プレゼンテーションソフトの実践例として、新出文法の導入で文構造や場面を提示したものがあつた。視覚で提示することで、「この表現を使って会話したい。」という必要感が生まれるような表現活動を仕組むことができた。しかし、プレゼンテーションソフトは次の展開になると消えてしまうので、「分かったつもり」になることもある。「書く活動」を意図的に取り入れるなど、生徒の学力を保障する手立てを工夫する必要がある。

端末の効果的な活用方法として、端末上での英作文や意見文の作成、教員による添削があつた。生徒個人のフォルダにこれまでの作品が保存されていくため、容易に過去のものを振り返り、自分の成長を確認することができる。

また、教科書のデジタルCDから本文に関する画像を取り込み、それを参考にリテリングをする活動例もあつた。

今後は、端末を始めとしたICT機器を効果的に用いて、デジタル教科書の有効的な運用や即興的な言語活動についても研究を続けていきたい。

高野 佳之（滑・早月中）

富山市中教研「本年度の取組から」

富山市中教研英語部会では、研究主題に基づき、各学校において研究実践を重ね、その事例を持ち寄って紹介したり、情報交換を行ったりしている。

6月の定期部会は、城山中学校の体育館を会場に、3年ぶりに部員が集合しての開催となった。「教科書の効果的な活用について」というテーマでグループ討議を行い、各校での取組事例を紹介し合った。昨年度、多くの教員が新しい教科書の扱いに確たる自信のもてないまま今年度を迎えており、日頃の指導における悩みを共有する機会にもなった。基本本文の定着、基本本文を使った言語活動、本文の扱い等が話題の中心となり、様々な実践やアイデアを得ることができた。また、デジタル教科書使用のよさについても紹介があつた。久しぶりに行った「対面」による研修であり、部員同士が直接交流を図る貴重な機会だったとの声が多かつた。

県総合運動公園陸上競技場で実施した8月の定期部会も、集合開催とした。各自が作成した評価問題（「知識・技能」を評価するもの、「思考力・判断力・表現力」を評価するもの各々1つずつ）を持ち寄って協議した。同じ単元で評価するに当たっても、各部員が多様な視点から問題を作成していることが分かつた。また、10月の研究大会の指導案検討を参加者全員で行い、授業者にとって資するものになった。1月には、各部員が実践したパフォーマンス評価に関する資料や帯学習の例を持ち寄るなど、日頃の授業実践の成果や課題を共有した。

次年度も、「場面設定」、「相手意識」、「考えや気持ちを伝え合う活動」、「目的意識」等をキーワードに、研修を進めていきたい。

浦田 栄信（富・城山中）